

蜀朝の執権・諸葛亮

(劉封の処刑・三顧の礼・馬謖の死・北伐)

菊池良輝

A Regent of the Shu Dynasty "Zhu Ge - Liang"

— the Execution of Liu Feng, the Visit of Three Times,
the Punishment of Ma Su and Military Expedition to the North —

By Yositeru Kikuchi

承前

建安二十六年四月丙午、先主劉備によって建国された蜀漢（以下、蜀とする）王朝は、炎興元年冬、後主劉禪が、魏の征西將軍鄧艾に降ったことにより、崩壊した。四十三年間の命脉であった。

崩壊の主因が、劉禪の氣質にあったことは疑いのないところであろうが、劉家の人脈と諸葛亮の考え方・行動等を渉獵し少しく分析を加えてみたい。（劉家の人脈については系図参照）

一、諸葛亮の登用

蜀朝の興亡と諸葛亮の存在は正に唇齒の関係であるが、どのような事情で蜀朝に出仕することになったのか、一応整理してみる。

(一) 三顧の礼の真偽

所謂、「三顧之礼」は『三國志』卷三五・諸葛亮伝の次の記事による。

（建興）五年、率諸軍北駐漢中、臨発、上疏曰、（略）臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於乱世、不求聞達於諸、先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以当世之事、由是感激、遂許先帝以驅馳。

以後、五次にわたる北伐に際し、後主劉禪に奉った上表文の一節である。

同伝によると、諸葛亮は、「亮躬耕隴畝、好為梁父吟、身長八尺、每自比於管仲・樂毅、時人莫之許也、惟博陵崔州平・潁川徐庶元直

与亮友善、謂為信然」なる人物であり、前記上表文と矛盾なく対応している。

次いで同伝には、「時先主屯新野、徐庶見先主、先主器之、謂先主曰、諸葛孔明者、臥竜也、將軍豈願見之乎、先主曰、君与俱来、庶曰、此人可就見、此人可屈致也、將軍宜枉駕顧之、由是先主遂詣亮、凡三往、乃見」とあり、さらに、「襄陽記曰、劉備訪世事於司馬德操、德操曰、儒生俗士、豈識時務、識時務者在乎俊傑、此間自有伏竜・鳳雛、備問為誰、曰、諸葛孔明・隴士元也」とあり、一連の流れを形成している。

ところが、同じ個所で、裴松之は、「魏略曰、劉備屯於樊城、是時曹公方定河北、亮知荊州次当受敵、而劉表性緩、不曉軍事、亮乃北行見備、備与亮非旧、又以其年少、以諸生意待之、坐集既畢、衆賓皆去、而亮独留、備亦不問其所欲言、備性好結託、時適有人以髦牛尾与備者、備因手自結之、亮乃進曰、明將軍当復有遠志、但結託而已邪、備知亮非常人也、乃投髦而答曰、是何言与、我聊以忘憂耳、亮遂言曰、將軍度劉鎮南孰与曹公邪、備曰、不及、亮又曰、將軍自度何如也、備曰、亦不如、曰、今皆不及、而將軍之衆不過數千人、以此待敵、得無非計乎、備曰、我亦愁之、当若之何、亮曰、今荊州非少人也、而著籍者寡、平居發調、則人心不悅、可語鎮南、今國中凡有游戸、皆使自實、因録以益衆可也、備從其計、故衆遂強、備由此知亮有英略、乃以上客礼之、九州春秋所言」と記している。

片や、「劉備が諸葛亮の出仕を求めて三回も諸葛亮の居宅を訪ねた」とあり、片や、「魏略を引いて、蜀の将来を案じた諸葛亮が劉備に

接近して、奮起を促した」とある。

まったく相反する記事である。どちらかが正鵠を得ているとすれば、他の書はその歴史書としての權威に大きな瑕疵が生じかねない記事でもある。

『三国志』は、「脉絡分明、文筆精煉、被譽為良史」と謳われている。一方、裴松之はさすがに両書の整合性に迷ったらしく、次のように正直に述べている。

臣松之以為亮表云、先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以当世之事、則非亮先詣備、明矣、雖聞見異辭、各生彼此、然乖背至是、亦良為可怪。

『魏略』は、周知のように清の張鷟一が逸文を編纂しており、『唐書』経籍志に掲載もされている。又、作者の魚豢は他に、『典略』なる書物も編纂しており、同書の名は、前記『旧唐書』の他に、『隋書』にも見える。この『魏略』の製作年代を伊藤徳男氏は、「武帝の太康年間に成るもの」とされている。太康年間は西暦二八〇—二八九年であるから、『三国志』と同時期の成立である。陳寿・魚豢は共に同時代に生を受けたと思われるのに何故、対極的な文言が出てくるのか。

陳寿は蜀晋両朝に仕え、蜀では觀閣令史となるが、黄皓に「屢遭貶黜」などの圧迫を受ける。晋では著作郎・治書侍御史等の職に就いている。

一方、魚豢は魏郎中である。

著作郎・治書侍御史・郎中共々秩六百石であり、いずれも第六品

官である。両者とも似たような地位にあったことが分かる。情報蒐集能力も法的にはそれほど差異はなかったものと思われる。

この辺の疑問につき、宮川尚志氏は、「孔明出廬に関する『三国志』と『魏略』との二説は、中心の事実を伝えたものとしては『三国志』を取るべきであろうがまわりの事情を明かにするには『魏略』の云う所を顧みる必要があると云うことである」と述べておられる。説明したい情況は分るが、これは堀敏一氏も指摘されておられるように、「諸葛亮が先に出かけたか、劉備の方が先に会いにいったか、どちらが正しく、どちらが誤っているのかであって、妥協を許さない問題である。」

陳寿が蜀の滅亡を目の当たりにしたのは三十一歳の時である。以後六十五歳で他界する迄、自分が仕えた二王朝の興亡を悉に觀察する立場にあったことを考えると、その筆が相当の正鵠を得ているであろうことは十分察しがつく。

一方、魚豢は魏の郎中としか伝わらず、生没年も不詳である。『魏略』という書名からして魏の興亡史が中心であろう。蜀の興亡にどのように拘り合ったのか、蜀の地に足を踏み入れて史料の蒐集に当たったのか等が一切不明だけに、この方面からの考察も即断は危険である。

ただ、『魏略』に掲載されている、諸葛亮が劉備に近づく記述は、歴史的背景に疑点がなく、当然あつてしかるべきことなので、否定はできない。又、諸葛亮が劉備に近づくその情景が、極めて常識的に写るので説得力もあるように思える。所謂「三顧礼」が極めて劇

的な要素を持つだけに、対比も又際立つ。

これについて、黄子瑞は、「諸葛亮が後主劉禅に奉げた前出師表の作為・虚偽は不可能」と述べている。今日の中国史学界では、前出師表の掲載・内容については、基本的に受け入れる傾向にあるようである。

「前出師表」を採れば『魏略』は否定され、『魏略』を採れば「前出師表」は否定されかねない。どの道、この問題の即断は不可能であり、後世に委ねるより方法がないようである。

ただ、『三国志』諸葛亮伝の最後に集録されている次の陳寿の言辭は、彼自身が肌で感じたことと思われ、又、諸葛亮史料の収集にかけた成果の集約のようでもあり、諸葛亮史料の信憑性をも伺わせるものがある。

青竜二年春、亮帥衆出武功、分兵屯田、為久駐之基、其秋病卒、黎庶追思、以為口実、至今梁・益之民、咨述亮者、言猶在耳。

尚、『華陽国志』卷七・後主伝は、諸葛亮の出師表を、「上疏曰」として掲載しているが、所謂「三顧礼」記事はない。

作者常璩の見た史料には、「三顧礼」記事はあつたのであろうか、なかったのであろうか。「三顧礼」が『三国志』を彩る事項だけに不思議とも言える。

(二) 躬耕隴畝の地

諸葛亮の所謂「躬耕隴畝」の所在については、亮自身の劉禅への上表文の中に、「躬耕於南陽」とある他、「亮躬耕隴畝」記事の裴

注に、「漢晋春秋曰、亮家于南陽之鄧県、在襄陽城西二十里、号曰隆中」とあるのに依る。

南陽は『後漢書』卷三二・郡国志に「南陽郡、雒陽南七百里、三十七城、戸五十二万八千五百五十一、口二百四十三万九千六百一十八人」とある「南陽」であり、現・河南省南陽市である。鄧県は同郡条の統県の一として挙げられている「鄧有鄧聚」とある「鄧」であり、現・湖北省襄陽市である。襄陽は同書同卷の「南部、秦置、雒陽南一千五百里、十七城、戸十六万二千五百七十、口七十四万七千六百四、(略)襄陽有阿頭山」とある襄陽であり、現・湖北省襄陽市である。隆中は「亮躬耕隴畝」記事中の裴注の「漢晋春秋曰、亮家于南陽之鄧県、在襄陽城西二十里、号曰隆中」や、『水経注』卷二八・沔水篇に「昔諸葛亮好為梁甫吟、每所登遊、故俗以樂山為名、沔水又東逕隆中、歷孔明旧宅北、亮語劉禪云、先帝三顧臣於草廬之中、咨臣以当世之事、即此宅也」とある隆中であり、現・湖北省襄陽市の西に位置するとする。

隆中が襄陽市の西とすると、前出師表に言う「臣本布衣、躬耕於南陽」はどうなるのであろう。

この問題につき、先記、黄士瑞は諸葛亮躬耕隴畝の地が南陽であったか、襄陽であったかは中国史学界でも定説がない、とした上で、司馬光の、諸葛亮は南陽に居住していて、襄陽西郊の隆中に一時寓居した、という説を紹介している。そして最後に南陽臥竜岡にしろ、襄陽隆中にしろ、いずれも、諸葛亮を敬慕することから起された記念地である、と結んでいる。

隆中が襄陽の西郊に位置することに異論はなく、前出師表が歴史的事実とすれば、きわめて常識的見方である。

又、諸葛亮が劉備と出会った時の劉備の居住地は、先記した通り本文が「新野」とし、裴注が述べる『魏略』は「樊城」としている。新野は『後漢書』卷三二・郡国志「南陽郡」条の統県の一として挙げられている「新野」であり、現・河南省新野県である。

樊城は、『三国志』卷四・齊王芳伝、正始二年夏五月条に「呉将朱然等围襄陽之樊城、太傅司馬宣王率衆拒之」とある「樊城」であり、現・湖北省襄陽市である。

当時の各地の位置関係を示したものが図1である。

各地間を手許のキルビメーターで計てみると、南陽―新野間が約四十五キロメートル、新野―襄陽間が約六十五キロメートル、襄陽(襄陽の対岸)―隆中間が約十五キロメートルである。

本文では、劉備は諸葛亮を訪問するのに新野―襄陽―樊城―隆中を経たことになる。全長約八十キロメートルである。

八十キロメートルは当時の里程で約一八三里となる。

一日に踏むことのできる距離はどのくらいであろうか、明代の記録であるが、『西域行程記』という紀行記がある。同書は、永楽二(一四一四)年正月一三日巳時に肅州衛(甘肅省酒泉県)を出行し、同年閏九月一四日に最終目的地である哈烈(赫拉特。アフガニスタン Afghanistan のヘラート Herat)に着くまでの記録であり、全日例外を除き一日に経過した里数が明記してある。

当然考えられることであるが、人馬不得飲食(二月初二日)・

人馬難住（同十九日）・零飲人馬（同二十日）・馬由水中渡、泥陷、死者甚多（七月十一日）などあり、騎馬であったと推定される。

同書によると一日の行程は「約行三百里」という例外はあるが、十余里から一五〇里である。頻度が高いのは五〇里（三〇日）・七〇里（二五日）である。約二十九キロメートルと四十キロメートルである。

新野―隆中間は八十キロメートルであるが、注意を要するのは途中六個所渡河しなければならないことである。中でも襄陽から樊城に渡るには相当の堅牢船が必要であつたであろうし、乗船迄の準備時間も考慮しなければならない。

この事情を考えると『西域行程記』の中に、「明起、順川流西行、渡水七八回、水勢衝急、約行九十里、於草灘上安宮（六月十六日）」とあるのが一つの参考になるのではあるまいか。渡河七・八回で行程九十里＝約五十キロメートルである。しかしこの時は太陽が顔を出すと同時に起床しているので、おそらく日中の間、騎乗を進めていたのであるから、実際に応用する場合は多少短か目に計測する必要がある。

一般的には三・四十キロメートルと考えられるが、劉備の隆中行は途中の漢水の渡河をはじめとする数回の渡河の行程を考えると、八十キロメートルの行程は、片道二―三日の行程である。

もっとも同じ諸葛亮伝に「曹操之衆、遠来疲弊、聞追予州、輕騎一日一夜行三百余里、此所謂彊弩之末、勢不能穿魯縞者也」ともあり、劉備も飛ばせば一日で着いたかもしれない。

しかし、諸葛亮寓居に日中には入らねばならないことを考えると、片道三日以上、往復五―六日以上とみるのが妥当なところである。

三顧・三往が文字通り三回訪問したのであれば、人材発掘という大目標があつたにせよ、熱意の高さは相当のものがあつた。一面、天下を視野に入れていた劉備の、智謀の臣を求める必然性の高さを伺うことができる伝承でもある、ということもできる。

尚、可能性は薄いだが、南陽―新野間は約四十五キロメートル。一―二日の行程であるが、渡河地が二箇所ある。こちらも日中に諸葛亮寓居に入らねばならないとすると、片道二日以上、往復三―四日以上みるのが無難である。

ところで先記した裴注が引く『魏略』記事に依れば、樊城（襄陽）に屯していた劉備に諸葛亮が北行して会いに行った」という。

隆中から樊城へは「東行」という感じだが、樊城近傍では隆中以外に諸葛亮の居住地は見当らず、隆中から見れば樊城は確かに北であるから北行で良いのかもしれない。距離は約十五キロメートルであるからそう無理な行程でもない。

「諸葛亮躬耕隴地」は「隆中」で良いと思われる。しかし、この問題は「劉備が諸葛亮を訪問したのか」「諸葛亮が劉備を訪問したのか」とも係っている。

ごく自然の情景としてはどうか。筆者は『魏略』の記事の方が素直に受け入れられるような気がするが、そうすると「前出師表」が大きく立ちはだかる。

筆者が、劉備と諸葛亮の出会いにつき拙い論を張ったのは、諸葛

亮の性行につき、いささかでも知りたいと思ったからである。

しかし、所謂「三顧礼」問題は、現時点での即断は不可能と言わざるを得ない、とするしか方法はないようである。

二、諸葛亮の法的思考

(一) 劉封の「使自裁」

申儀が劉備の養子劉封に反旗を翻した為、劉封は成都に帰還した。この時、劉備は劉封がかつて孟達を犯かし辱めたこと、関羽を救援しなかったことを責めた。

この時、諸葛亮は「諸葛亮慮封剛猛、易世之後終難制御、勸先主因此除之、於是賜封死、使自裁」という挙に出たのである。

関羽の死は劉備にとって痛根事であったとしても、諸葛亮の立場は別のはずである。この歳、劉備は漢中王と為り、それこそ中原に鹿を逐おうとする大切な時期である。関羽という大柱を失ったこの時こそ、人材の育成発掘に心を配らねばならぬはずである。それを、劉備の養子であり、「有武芸、氣力過人」という器量人を自裁させてしまうなど、少なくとも一国家の参謀格を以て任ずる者のすることではない。

ただ、劉禅はこの時十三歳と推定されるが、後に「幸値劉禅闇弱無猜險之性」と称される、皇帝としては失格と言わざるを得ない性情を憂慮し、それこそ後のお家騒動の芽を今の内に摘み取っておこうとしたことは十分考えられる（易世之後終難制御）。

しかし、もしそうだとすればそれこそ考え過ぎである。

劉禅には他に劉永・劉理の二人の庶弟が知られている。この二人は後の蜀滅亡にも、劉禅の子・北地王劉禪のように自殺することもなく、洛陽に東遷し余生を全うしている。こうしてみるとこの二人も又、劉禅と似たような性格だったのであろうか。忖度することは危険ではあるが、この二人の庶弟も劉封のような衆に過ぎた人材でなかったことだけは確かなようであり、その事が諸葛亮の警戒心を呼び起こさなかったのであろうか。

関羽は所謂知謀の臣を置かなかつたし、孫権と隙を生じる原因となった孫権の女の結婚申込みに際しても、「羽罵辱其使、不許婚」と外交的考慮など眼中にない言辞を弄しており、その死は自ら招いたようなところがある。劉備は後に関羽の死を理由として伐呉の師を発動するなど、感情的とも思える行動に出るが、この時の劉封の自裁には「先主為之流涕」と、おそらく劉封の死への哀悼と思える涙を流している。

いずれにせよ、「劉封使自裁」は時局を見据えない、性急な結論と思わざるを得ない。

後の蜀朝崩壊があまりにもあっけないだけに、この劉封の死が、又、際立つのである。

(二) 馬謖の死

諸葛亮は建興六年、所謂第二回目の北伐行に出る、しかし、この時は「魏明帝西鎮長安、命張郃拒亮、亮使馬謖督諸軍在前、与郃戰于街亭、謖違亮節度、挙動失宜、大為郃所破、亮拔西県千余家、還于漢中」という結果となる。

問題はその後である。前記、諸葛亮伝は「戮^{五七}謾以謝衆、（略）請自貶三等」とし、『三国志』馬謖伝は、「謾^{五八}下獄物故」としている。

諸葛亮伝は「刑殺」であり、馬謖伝は「入獄死」である。

馬謖起用に關しては「亮^{五九}出軍向祁山、時宿將魏延・吳壹等、論者皆言以為宜令為先鋒、而亮違衆拔謖、統大衆在前、与魏將張郃戰于街亭、為郃所破、士卒離散」という経緯がある。もとより部將の起用について一々責任を云々するのは酷がある。しかし、諸葛亮の性格からして強い自責の念にかられたであろうことは十分想像される、その彼が刑殺などという挙に出るであろうか。

かつて劉封に対しては果斷な措置を以て臨んでいるが、この時期の人材確保の必要性はより切実だったはずである。馬謖伝に言う「下獄」というのはその時の諸葛亮の逡巡の現れかもしれない。

その個所で裴注は「襄陽記曰、謖臨終与亮書曰、明公視謖猶子、謖視明公猶父、願深惟殫絲興禹之義、使平生之交不虧於此、謖雖死無恨於黄壤也、于時十万之衆為之垂涕」と記しているが、それこそ自らを律せんとする前の馬謖の心情を慮つてのことであつたかもしれない。

次いで「蒋琬後詣漢中、謂亮曰、昔楚殺得臣、然後文公喜可知也、天下未定而戮智計之士、豈不惜乎、亮流涕曰、孫武所以能制勝於天下者、用法明也、是以楊干乱法、魏絳戮其僕、四海分裂、兵交方始、若復廢法、何用討賊邪」と続けている。

ここでの情景を見る限りにおいては、「魏略曰、亮在荊州、以建安初与潁川石広元・徐元直・汝南孟公威等俱游学、三人務於精熟、

而亮独觀其大略」とあるのとは情景を異にしている印象をもつ。むしろ「大略」を把らえていたのは蒋琬の方ではあるまいか。

諸葛亮の、先記した劉封や、馬謖への対拠の仕方と対局を感ずるのが曹操の次の措置である。

青州黄巾衆百万入兗州、殺任城相鄭遂、転入東平、劉岱欲擊之、鮑信諫曰、今賊衆百万、百姓皆震恐、士卒無鬪志、不可敵也、觀賊衆羣輩相随、軍無輜重、唯以鈔略為資、今不若畜士衆之力、先為固守、彼欲戰不得、攻又不能、其勢必離散、後選精銳、擲其要害、擊之可破也、岱不從、遂与戰、果為所殺、信乃与州吏万潜等至東郡迎太祖領兗州牧、遂進兵擊黄巾于寿張東、信乃戰鬪死、僅而破之、購求信喪不得、衆乃刻木如信形状、祭而哭焉、追黄巾至濟北、乞降、冬、受降卒三十余万、男女百余万口、収其精銳者、号为青州兵。

鮑信という智勇共に兼ね具えた人物の緻密果斷な行動があつたにせよ、又、乞降を拒否して彼達を野に放つたら、「唯以鈔略為資」とする餓狼集団に成り果てる心配があつたにせよ、黄巾の賊三十余万を自己の軍団に組み入れてしまうというのは美事である。

先記した裴注所引『襄陽記』の「亮流涕曰」以下は、天下統一を前にして一人でも有能な人物が欲しい時に、如何にも正論の開陳実行という印象をもつ。諸葛亮自身、位を三階級下げているのだから、そのことを以て全て自身の責任として、馬謖を生かす方法はなかつたのであろうか。惜しまれる処置である。

三、北伐の考え方

所謂「北伐行」は前後六回を数えることができる。回数毎に『三国志』後主伝・諸葛亮伝及び『華陽国志』を中心に整理すると以下の通りとなる。（「各地の距離概念」参照）

〔第一回〕^{六四} 図2参照

『後主伝』

（建興）五年春、丞相亮出屯漢中、營沔北陽平石馬。

『諸葛亮伝』

（建興）五年、率諸軍北漢中、（略）今当遂行、屯于沔陽。

『華陽国志』

（建興）五年、魏太和元年也、春、丞相亮將北伐、上疏曰（略）

二月、亮出屯漢中、營沔北陽平・石馬。

漢中は陝西省南鄭県、現・陝西省漢中市。沔北は沔水（漢水の上流）の北部地域。陽平は陝西省寧羌県。石馬は陝西省沔県。沔陽は陝西省勉県（菜園子）東旧州舗。

成都からの経路は、途中、梓潼（現・四川省梓潼）迄は平原であるが、次いで所謂劍閣道の難所に入り、漢寿（四川省広元）から、漢水（嘉陵江）沿いに山間の狹隘地を通り、沔陽（陝西省勉県）に出、平原地帯を経て漢中（同漢中市）に入る。

手許のキルビメーターで計てみると、約四八〇キロメートルある。

〔第二回〕 図3参照

『後主伝』

（建興）六年春、亮出攻祁山、不克。

『諸葛亮伝』

（建興）六年春、揚声由斜谷道取郿、使趙雲・鄧芝為疑軍、拋箕谷、魏大將軍曹真舉衆拒之、亮身率諸軍攻祁山、戎陳整齊、賞罰肅而号令明、南安・天水・安定三郡叛魏應亮、關中響震、魏明帝西鎮長安、命張郃拒亮、亮使馬謖督諸軍在前、与郃戰于街亭、謖違亮節度、舉動失宜、大為郃所破、亮拔西県千余家、還于漢中、戮謖以謝衆。

『華陽国志』

蜀軍に馬謖の他に、王平等四人の名が見えるが他は『諸葛亮』と大略同じ。

祁山は甘肅省西和県東北。斜谷道は陝西省郿県に至る道。郿は陝西省郿県東渭河北岸。箕谷は陝西省褒城県、南安郡は甘肅省隴西県東南、天水郡は甘肅省甘谷県東。安定郡は甘肅省鎮原県。長安は陝西省西安市西北。街亭は甘肅省天水市東南街子鎮。西県は甘肅省西県。

漢中から祁山迄は山岳重疊たる道を行くこと二四〇キロメートルである。成都—漢中—祁山は七二〇キロメートルの難行軍である。

〔第三回〕 図3参照

『後主伝』

（建興六年冬、亮）復出散関、困陳倉、糧尽退。魏將王双率軍追亮、亮与戦、破之、斬双、還漢中。

『諸葛亮伝』

(建興六年) 冬、亮復出散関、囲陳倉、曹真拒之、亮糧尽而還。
(以下、後主伝と同じ)

『華陽国志』

右二書と大略同じ。

散関は陝西省宝鶏市西南大散嶺上。陳倉は陝西省宝鶏市東渭水北岸。

漢中から散関迄は、やはり山岳重畳たる道を行くこと約二四〇キロメートルである。散関から陳倉迄は約五〇キロメートル。成都—漢中—散関—陳倉は約七七〇キロメートルある。

〔第四回〕 図4 参照。

『後主伝』

(建興) 七年春、亮遣陳式攻武都・陰平、遂克定二郡。

『諸葛亮伝』

(建興) 七年、亮遣陳式攻武都・陰平、魏雍州刺史郭淮率衆欲擊式、亮自出至建威、淮退還、遂平二郡。

『華陽国志』

大略、諸葛亮伝に同じ。

武都郡は甘肅省西和県南。陰平郡は甘肅省文県白竜江北岸。

尚、『後主伝』は、「冬、亮徙府於南山下原上、築漢・樂二城」と続けている。

南山は陝西省秦嶺山脈。漢城は陝西省勉県(菜園子)東。樂城は陝西省城固県東。

武都郡へは一端漢中に駐屯、軍備を整えたと思われる。漢中—

武都間は約一九〇キロメートル。成都—漢中—武都間は約六七〇キロメートル。

陰平郡へは劍閣道を途中から北西に入り、現・白水江沿いのこれ又、山岳重畳たる山道を約二五〇キロメートル進まねばならない。成都—劍閣道—陰平は約五二〇キロメートルである。

建威—祁山は約二〇キロメートル、成都—漢中—祁山—建威は七四〇キロメートルの難行軍である。

〔第五回〕 図4 参照

『後主伝』

(建興) 九年春二月、亮復出軍圍祁山、始以木牛運、魏司馬懿・

張郃救祁山、夏六月、亮糧尽退軍、郃追至青封、与亮交戦、被箭死。

『諸葛亮伝』

(建興) 九年、亮復出祁山、以木牛運、糧尽退軍、与魏将張郃交戦、射殺郃。

『華陽国志』

(建興) 九年春、丞相亮復出圍祁山、始以木牛運、参軍王平守南圍、司馬宣王拒亮、張郃拒平、亮慮糧運不繼、設三策、告都護李平曰、上計斷其後道、中計与之持久、下計還住黃土、時宣王等糧亦尽、盛夏雨水、平恐漕運不給、書白亮、宜振旅、夏六月、亮承平指引退、張郃至青封交戦、為亮所殺、秋八月亮還漢中。青封は未詳。黃土は甘肅省甘谷県南か。

成都—祁山間は先記した通り、約七二〇キロメートルの難行軍

である。

〔第六回〕図 4 参照。

『後主伝』

（建興）十二年春二月、亮由斜谷出、始以流馬運、秋八月、亮卒于渭滨。

『諸葛亮伝』

（建興）十二年春、亮悉大衆由斜谷出、以流馬運、拋武功五丈原、与司馬宣王對於渭南、亮每患糧不繼、使己志不申、是以分兵屯田、為久駐之基、耕者雜於渭滨居民之間、而百姓安堵、軍無私焉、相持百余日、其年八月、亮疾病、卒于軍、時年五十四、（略）亮遺命葬漢中定軍山、因山為墳、冢足容棺、斂以時服、不須器物。『華陽国志』

諸葛亮にほぼ同じ。

渭は渭水。武功は陝西省郿県東四十里渭河南岸。

但し、『中国歴史地図集』では、渭水の北岸に図示している。五丈原は陝西省郿県南斜谷口西側。定軍山は陝西省沔県。

ここに言う斜谷道は、漢中—箕谷と出、北上し劍閣道と分かれ、現・秦嶺山脈の高峻に分け入り、同山脈の西側を越えて黄河に出、東に転じて陝西省郿県に出る経路である。漢中から郿県迄約一九〇キロメートルの難路である。さらに黄河を渡河して武功迄は約二〇キロメートル。成都—漢中—郿県—武功で約六九〇キロメートルとなる。

以上、見たように諸葛亮の北伐は、建興五年の漢中行を入れると

広義には六回となる。

中原に覇を唱えるには魏の平定は不可欠であり、その為には漢中への進出は必須である。ところがこれ迄見て来たように、漢中迄の道が如何にも遠く、且つ難行を具う。中でも途中の劍閣道越えは、それだけで一大難事である。

諸葛亮には、国の南方面・西方面を固め、しかる後に北・東に進出しようとする基本的な考え方があったようである。

建興三年の所謂南征はその第一歩であろう。

所謂北伐は蜀の北方、魏にとって西方面に攻略の手が伸びている。それは四川が如何に天府の地と称されたにしても、魏と比べたら国力の落ちる蜀に、力を増したいと考えた上での行動であろうか。

計数上を見ても諸葛亮は第五回の祁山攻撃（途中、二回目は漢中に駐まり、三回目を漢中から出撃したとして）の終了時点で、実に五、八五〇キロメートル余の行軍をしていることになる。

第六回武功攻略迄は実に六、五〇〇キロメートル余の行軍をしたことになる。しかも、「諸葛公夙興夜寐、罰二十以上、皆親擊焉、所噉食不至数升」という細事まで決裁してのことである。

又、成都での劉禪が、その凡庸さ由、成都にどのような事態が招来するかもしれない、心労は堪えなかったはずである。

六、五〇〇キロメートルという、卑近な例だが東京—下関間を三回強往復した距離に相当する。その大半は山岳重疊とした山道である。

それをほとんど連年に渡ってである。

表 〔諸葛亮の北伐行地及里程〕

回数	年（西暦）	行軍路及踏波概数距離	経路
1	建興5年春 (227)	往：成都—漢中 480 復：漢中—成都 480 } 960	劍閣道
2	同 6年春 (228)	往：成都—漢中—祁山 720 復：祁山—漢中 240 } 960	同
3	同 6年冬 (228)	往：漢中—散関—陳倉 240 復：陳倉—散関—漢中—成都 770 } 1,010	同
4	同 7年春 (229)	往：成都—漢中—祁山—建威 740 復：建威—祁山—漢中—成都 740 } 1,480	同
5	同9年春2日 (231)	往：成都—漢中—祁山 720 復：祁山—漢中—成都 720 } 1,440	同
6	同12年春2月 (234)	往：成都—漢中—郿 680	斜谷道

諸葛亮の六回の北伐行の内、第一回く第五回はどちらかと言うと、敵を殲滅するというより、当該地方の攻略という意味合いが出ている。そこに司馬懿が戦闘に出てくれば作戦を屈指して倒したいと思っていたのであろう。心底、魏攻略を感じるのは、建興十二年の斜谷道よりの北上である。筆者はどうしてもっと早くに斜谷道經由を取らなかったかと愚考している。戦闘において主も威力を発揮するのは速度であろうから、経路はなるべく短距離をとるのが良い。

建興九年以前の北伐行が、常に西へ西へと動いているのは、どこか、まどろこしい思いがする。尤も、斜谷道の東側には子午道（図4参照）があり、より険峻な経路と推測されるが、当然、京兆（長安）には近い。諸葛亮はこの経路を使用した形跡は無い。反対に魏側はこの経路を使って蜀への侵攻を計ろうとして

いる。『^九三国誌』後主伝、建興八年秋条に、「魏使司馬懿由西城、張郃由子午、曹真由斜谷、欲攻漢中」とあり、魏軍が子午道と斜谷道を経路として漢中に侵攻しようとした様が明記してある。この時は「丞相亮待之於城固・赤阪、大雨道絶、真等皆還」となり、魏軍は軍を還しているが、子午道・斜谷道の二道が、蜀への侵攻の要であることを見抜いていたと思われる。

諸葛亮の西方経路は、地域の経路にはそれなりの効果は認められるが、先記したように、劇務の中にあつて貴重な時は刻々と過ぎて行っている。その間、司馬懿は蜀に数倍する国力を背景に、軍事力の保全と育成に務めていたが、それが諸葛亮に勝つ要諦であることを確信していたのであろう。

諸葛亮が実行した六回、六千五百キロメートルに及ぶ長途の遠征の労力がある程度回数を絞りを、兵力を集中し、子午道・斜谷道を利用して一気に京兆（長安）——洛陽を衝くことは考えなかったのだろうか。

西方経路に費いやしたエネルギーの膨大さを思う時、唯、隔靴搔痒の感を抱くのは筆者だけであろうか。

結 語

蜀朝は劉封の処刑に始まり、諸葛亮が丞相となり、彼の死を以て実質上終了している。

言うなれば、諸葛亮が執権として君臨し、彼の法意識の下で国家が運営され、彼の高い人間性のもとで一般の兵士も喜んで命を投げ出していったのである。

しかし、如何せん「幸値劉禪闇弱、無猜險之性」という劉禪には、諸葛亮の言うままにはなっても、諸葛亮の心情の理解にはほど遠かった。

景耀六年冬、鄧艾が蜀に入った時、凡主劉禪はあっさりと降服している。まことにあつけない一王朝の崩壊であるが、せめての救いは、北地王諶が降服に際しての、裴松之が漢晋春秋を引いての「若理窮力屈、禍敗必及、便当父子君臣背城一戰、同死社稷、以見先帝可也、後主不納、遂送鹽綬、是曰、諶哭於昭烈之廟、先殺妻子、而後自殺、左右無不為涕泣者」とある記事である。少なくとも諸葛亮の理念を理解していた者が劉家に一人はいたと、瞑すべきであろうか。

〔注〕

- 一、標点本『三國史』卷三三・先主伝に「為文曰、惟建安二十六年四月丙午、皇帝備敢用玄牡、昭告皇天上帝后土神祇、漢有天下、歷數無疆」とある。（『同書』八六頁、中華書局。一九七三年）。
- 二、標点本『三國史』卷三三・後主伝、景耀六年夏条に「改元為炎興、冬、鄧艾破衛將軍諸葛騰於綿竹、用光祿大夫譙周策、降於文」とある。（九〇〇頁）。
- 三、標点本『三國志』卷三五・諸葛亮伝、九一九頁。
- 四、前掲注三、九二頁。
- 五、前掲注三、九三頁。
- 六、前掲注三、九三頁。
- 七、主編・邱樹森『中国歴代人名辞典』『陳寿』江西教育出版社。一九八九年。二〇四頁。
- 八、前掲注三、九四頁。
- 九、弁山王澤『魏略輯本』甲子孟夏。陝西文献徵輯処刊。
- 一〇、標点本『旧唐書』卷四六・経籍志、正史類。中華書局。一九七五

年。一、九六頁。

- 二、前掲注二〇。「雜史類」。一、九四頁。
- 三、標点本『隋書』卷三三・経籍志、雜史類、中華書局。一九七二年、二一頁。
- 三、伊藤徳男「魏略の製作年代に就いて」『歴史學研究』第四卷第一号。歴史學研究会編輯。一九三五年。九一―九七頁。
- 四、陳寿の没年は、西暦二九七年。前掲注七。
- 五、前掲注七。
- 六、前掲注三。
- 七、名譽主編・張性煥、主編・呂宗力『中国歴代官制大辞典』『著作郎（三〇頁）』『治書侍御史（五五頁）』『郎中（五五頁）』北京出版社出版。一九九四年。
- 八、前掲注七。八三・八四頁。
- 九、宮川尚志「孔明の出廬についての異説」『六朝史研究・政治社会篇』日本學術振興會。一九五六年。三三頁。
- 一〇、堀敏一「曹操と諸葛孔明の出仕」『律令制と東アジア世界―私の中国史学（二）』汲古書院。一九九四年。三六頁。
- 三、黄子瑞「諸葛亮躬耕地并考述評」『史学月刊』一九九一年第三期。三、前掲注三。三三頁。
- 三、晋常璩撰『華陽国志』卷七・劉後主志。一九五七年。成都志古堂據題標館本影刻。
- 四、前掲注三。九〇頁。
- 五、標点本『後漢書』中華書局。一九七三年。三、四六頁。
- 六、復旦大學歴史地理研究所・中国歴史地名辞典編委會『中国歴史地名辞典』『南陽郡』江西教育出版社。一九八五年。五七頁。
- 七、前掲注五、同頁。
- 六、編輯者・謝壽昌他『中国古今地名大辞典』『鄧県』台湾商務印書館。中華民國六十一年。一、二〇二頁。及び前掲注六、二〇四頁。
- 六、前掲注五、三、四九―八〇頁。
- 三、前掲注六、「襄陽郡」。九三頁。
- 三、前掲注三、九二頁。

三、後魏鄭道元撰清戴震校『水經注』世界書局印行。中華民國五十八年、三〇頁。

三、前掲注三、「隆中」ハ三頁。尚、同書は「東漢末諸葛亮隱居于此、向劉備提出了著名的隆中对」と記している。及び、前掲注六、「隆中山」。九六二頁。尚、同書は「在湖北襄陽縣西二十里、諸葛亮家於鄧縣、在襄陽城西二十里、号曰隆中、山畔為草廬、山半為抱膝石、隆起如墩、可坐十数人、下為躬耕田、東南十里有臥龍山、二十里有伏龍山、皆以武侯名」と記している。及び『中華人民共和國分省地圖集』『河南省』『湖北省』。地圖出版社。一九七四年を参照。

四、譚其驤主編『中国歴史地圖集—三国・两晋時期』『荊州』。地圖出版社出版。新華書店上海發行所發行。

五、前掲注三、三〇六頁。

五、前掲注三、「新野縣」。二二頁。

五、標点本『三国志』卷四・齊王芳伝、二九頁。

六、前掲注三、九五頁。

六、前掲注四。及び、U.S. Agency Aerospace Center, ONC G-9 & H-11 China (St. Louis Air Force Station 1980)。

四、小泉袈裟勝編『図解單位の歴史辞典—新装版』柏書房。一九九一年。二四頁。魏「正始弩尺」により算出。

80km

0.243m×6尺×300歩 ≒ 182.8里

四、中外交通史籍叢刊『西域行程記・西域番國志』明・陳誠原著、周連寬校注、中華書局。一九九一年。三一六頁。前掲注四によれば、明代の一里は約五七〇メートルと推定される。

0.32m×6尺×300歩 ≒ 570m

尚、当時の地名の現在地比定は、蔡文治他編『日漢・漢日世界地名訳名手冊』中国對外經濟貿易出版社、一九八三年に従った。

四、前掲注三、二九頁。

四、標点本『三国志』卷四〇・劉封伝に「劉封者、本羅侯寇氏之子、長沙劉氏之甥也、先主至荊州、以未有繼嗣、養封為子」とある。

中華書局。二二頁。

四、前掲注三、九四頁。

四、標点本『三国志』卷三六・關羽伝に「(建安二十四年、孫)權已扼江陵、尽虜羽士衆妻子、羽軍遂散、權遣將逆擊羽、斬羽及子平于臨沮」とある。中華書局。二二頁。

四、標点本『三国志』卷三二・先主伝、建安二十四年条に「秋、羣下上先主為漢中王、(略)遂於沔陽設壇場、陳兵列衆、羣臣陪位、讀奏訖、御王冠於先主」とある。中華書局、八四一頁。

四、前掲注三、九二頁。

四、前掲注二、『三国志』卷三三・後主伝、章武三年夏五月条に「後主襲位於成都、時年十七」とある。尚、同伝の裴注が引く『魏略』によれば、劉禪は劉封自裁時に二十六歳頃と推定される。中華書局。八三四頁。

四、前掲注三、二八頁。

五、標点本『三国志』卷三四・劉永伝に「劉永字公寿、先主子、後主庶弟也」とある。中華書局。二七頁。

五、標点本『三国志』卷三四・劉理伝に「劉理字奉孝、亦後主庶弟也、与(劉)永異母」とある。中華書局、二八頁。

五、前掲注三に「是日、北地王(劉)諶傷國之亡、先殺妻子、次以自殺」とある。九〇頁。

五、前掲注三、二八頁。

五、前掲注一、『三国志』卷三三・先主伝、章武元年条に「(六月)初、先主忿孫權之襲關羽、將東征、秋七月、遂帥諸軍伐吳」とある。九〇頁。

五、前掲注三、九四頁。

五、前掲注三、二八頁。前掲注二、『三国志』卷三二・後主伝、建興六年条に「春、亮出攻祁山、不克」とある。八六頁。

五、前掲注三、二八頁。

五、標点本『三国志』卷三九・馬謖伝。中華書局。九四頁。

五、前掲注三、同頁。

六、前掲注三、二二頁。

六、標点本『三国志』卷一・武帝紀、初平三年夏四月条。中華書局。六頁。

七、前掲注二、八頁以下。前掲注三、九頁以下。

八、前掲注三。

九、作図に際しては、前掲注三の『中華人民共和国分省地図集』、注四及び注五の各関係箇所を参照した。

十、前掲注六、二四頁。

十一、六・六、『華陽国志訳注稿(7)』東洋大学アジア・アフリカ文化研究所「研究年報」一九八六年・第二号。一九八七年三月。八頁。

尚、汚水について前注『中国歴史地名辞典』「汚水(四九頁)」は「即今漢江及其北源陝西留坝县西沮水、(略)漢江自今湖北武漢市注入長江、故自今武漢市以下長江古時亦通称汚水」としている。

前掲注六、八頁参照。

十二、前掲注六、「沔陽縣」四〇頁。

十三、前掲注六、「祁山」五頁。前掲注六、八頁参照。

十四、前掲注六、「褒斜道(九八頁)」及び前掲注六、八頁参照。

十五、前掲注六、「郿縣」八八頁。前掲注六、八八頁参照。

十六、前掲注六、「箕谷」八九頁。

十七、前掲注六、「南安郡」五七頁。

十八、前掲注六、「天水郡」八頁。

十九、前掲注六、「安定郡」三三頁。

二十、前掲注六、「長安縣」二〇頁。

二十一、前掲注六、「街亭」八六頁。同書は「三國蜀建興六年(三六)諸葛亮

出師祁山、先鋒馬謖為魏將張郃戰敗于此」と記している。

二十二、前掲注六、「西縣」二七頁。

二十三、前掲注六、「散關」八四頁。前掲注六、八頁参照。

二十四、前掲注六、「陳倉縣」四二頁。

二十五、前掲注六、「武都郡」四三頁。

二十六、前掲注六、「陰平郡」七四頁。

二十七、前掲注六、「南山」五九頁。

二十八、前掲注六、「漢城」二四頁。

二十九、前掲注六、「樂城」二四頁。

三十、六、前掲注六、一〇〇頁参照。

三十一、前掲注六、「武功縣」四六頁。

三十二、前掲注六、「雍州」。

三十三、前掲注六、「五丈原」一〇二頁。

三十四、前掲注六、一〇三頁参照。

三十五、前掲注三、九六頁。

三十六、前掲注二、八六頁。

三十七、前掲注二、九〇一頁。又、系図参照。

尚、同書卷三四・後主太子璿伝の裴注に「孫盛蜀世譜曰、璿弟、瑤・琮・瓚・諶・炯・璿六人、蜀敗、諶自殺、全皆内徙、值永嘉大乱、子孫絶滅、唯(劉)永孫玄奔蜀、李雄偽署安樂公以嗣璿後、永和三年討李勢、盛參戎行、見玄于成都也」とある(九八頁)。

〔蜀漢王朝系図〕 依『三国志』

〔王皇后〕

第七代・景帝中子

【武帝】前一五六生―前一四〇即位―前八七崩

前漢第六代

【景帝】前一八八生―前一五七即位―前一四一崩

【趙敬肅王・彭祖】前一五五立川王

【中山靖王・劉勝】前一五四靖王―前一三三薨

元狩六（前一二七）封涿郡陸城亭侯
坐酎金失侯、囚家焉

〔賈夫人〕
有子百二十余人

先祖
東郡范令
父・世仕州郡

二一五
皇后
楊氏
孫夫人

菊池作成 数字は西暦

蜀朝の執権・諸葛亮

〔注〕 数字は頁数。

一、涿郡。西漢置、治所即今河南涿縣（『中國歴史地名辭典』江西教育出版社三）

二、陸城亭侯。亭侯。殿侯小者。中二千石。

三、東都。治所在濮陽縣（今河南濮陽縣西南）（前掲五）

四、范縣。治所在山東梁山縣西北（前掲六四）

五、荊州。西漢武帝置。東漢治漢壽縣（今湖南常德市東北）（前掲六七）

六、益州。西漢武帝置。東漢時治所在雒縣（今四川廣漢縣北）、中平（一八六）中移治綿竹縣（今四川德陽縣東北）、興平（二〇一）中又移治成都縣（今四川成都市）（前掲七五）

七、漢中城。戰國秦置。治所在南鄭縣（今陝西漢中市）。西漢移治西城縣（今陝西安康縣西北）。東漢還旧治、後為張魯所据、改名漢寧郡、建安（二〇）復改漢中郡。

（前掲五五）

八、永安宮。在今四川奉節府城東。三國蜀漢章武二年（三三）劉備自猓亭敗後、駐軍白帝城、建此宮。次年死于此。（前掲六三）

九、劉瑤以下の生母の名は未詳。

○【劉玄】李雄偽署安樂公

三四七孫盛見于成都

後主庶弟・小子

【劉永】二二二魯王―二三〇甘陵王―二六四東遷洛陽

【哀王・劉胤】二四四嗣安王―二五六卒

【殤王・劉承】二五四卒

後主庶弟・與劉永異母 諡悼王

【劉理】二二二梁王―二三〇安平王―二四四卒

牙門將 二六四移河東

劉封 一八九頃生―二一九自裁

（劉備）一六一生―二〇七荊州牧―二二一益州牧―二九漢中王―二九即皇帝

二三三殯于永安宮時年六十三

車騎將軍・張飛長女

穆皇后 二四五薨

〔敬哀皇后〕二二二太子妃―二三三皇后―二三七薨

〔張皇后〕

二二七貴人―二三八皇后―二六四遷洛陽

〔後主・劉禪〕二〇七生―二一九王太子―二三三襲位―二六三降伏

二六四東遷洛陽・安樂公―二七一薨於洛陽

〔劉瑤〕二二四生―二三八皇太子―二六四乱兵所害

敬哀皇后侍人

〔王貴人〕

〔劉瑤〕二三八安定王

〔劉琮〕二五二西河王―二六二卒

〔劉璠〕二五六新平王

〔劉諶〕二五九北地王―二六三先殺妻子次以自殺

〔劉恂〕二五九新興王―二七一嗣思公

〔劉璿（劉虔）〕二五九上党王

〔昭烈皇后・甘皇后〕二〇八死―二三二追諡思思夫人

各地の距離概念

数字はkm：実際の踏破距離を示す。

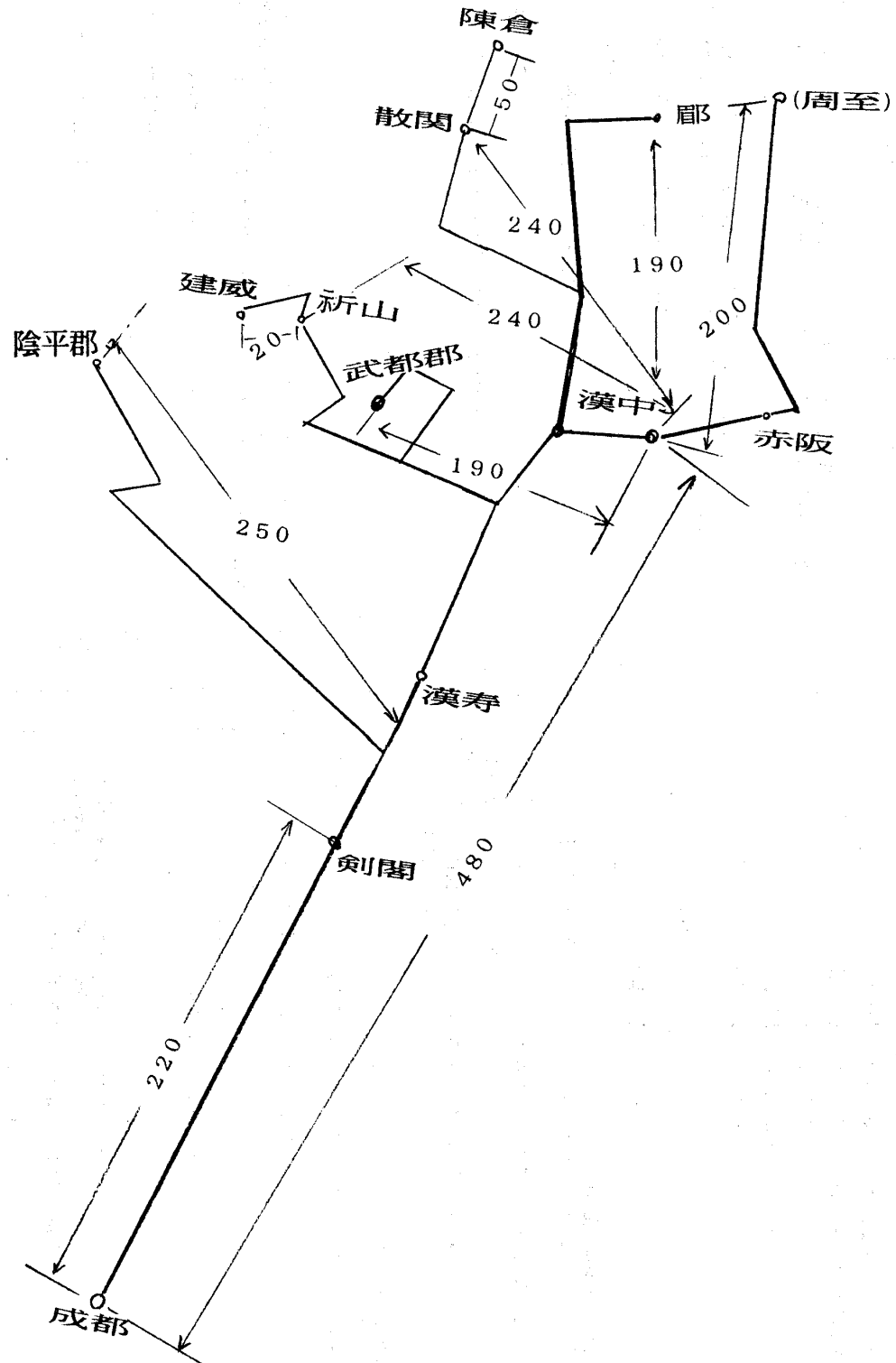


図1：南陽郡・新野・襄陽郡・樊城・隆中

1/100万

//// 道路

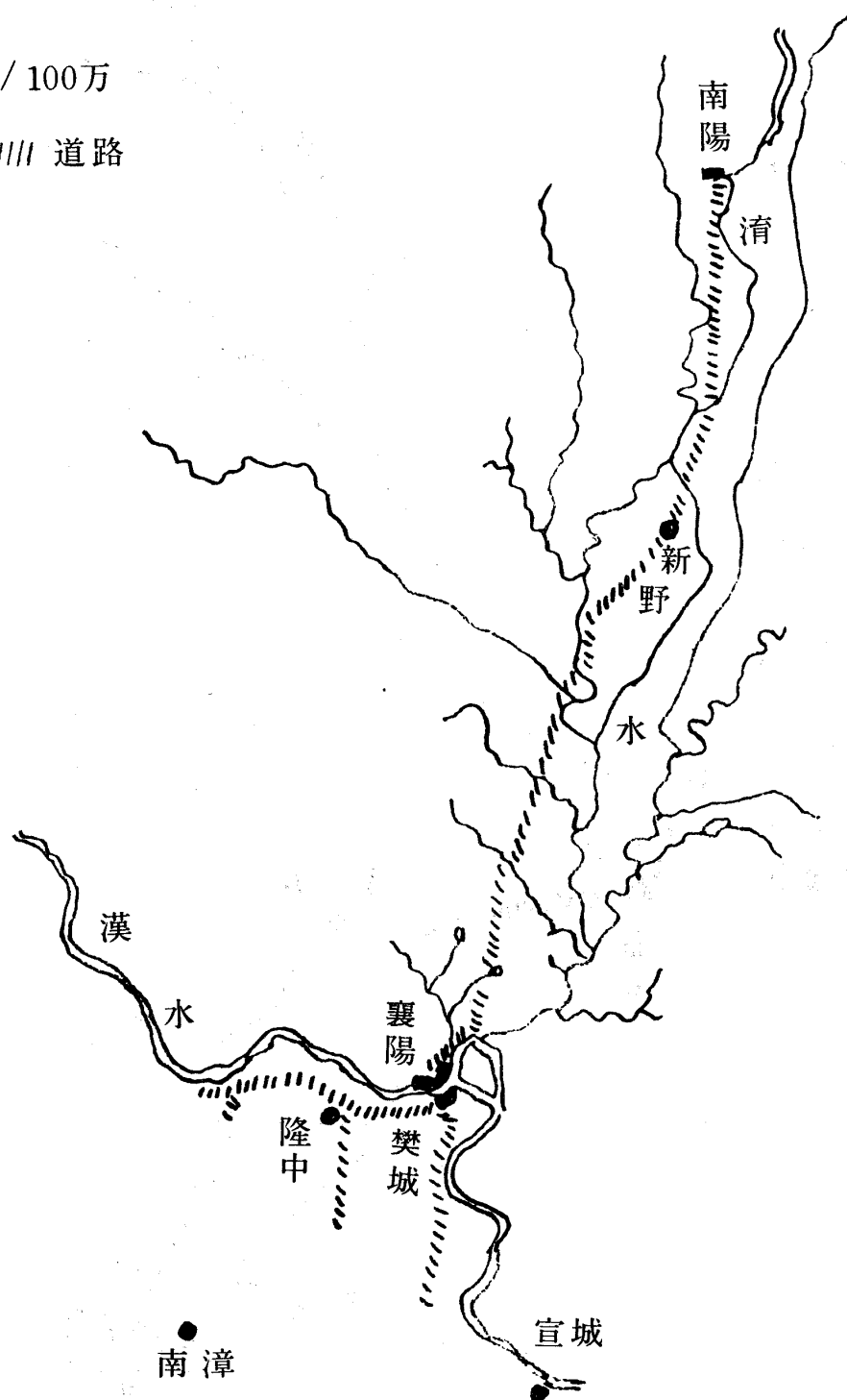
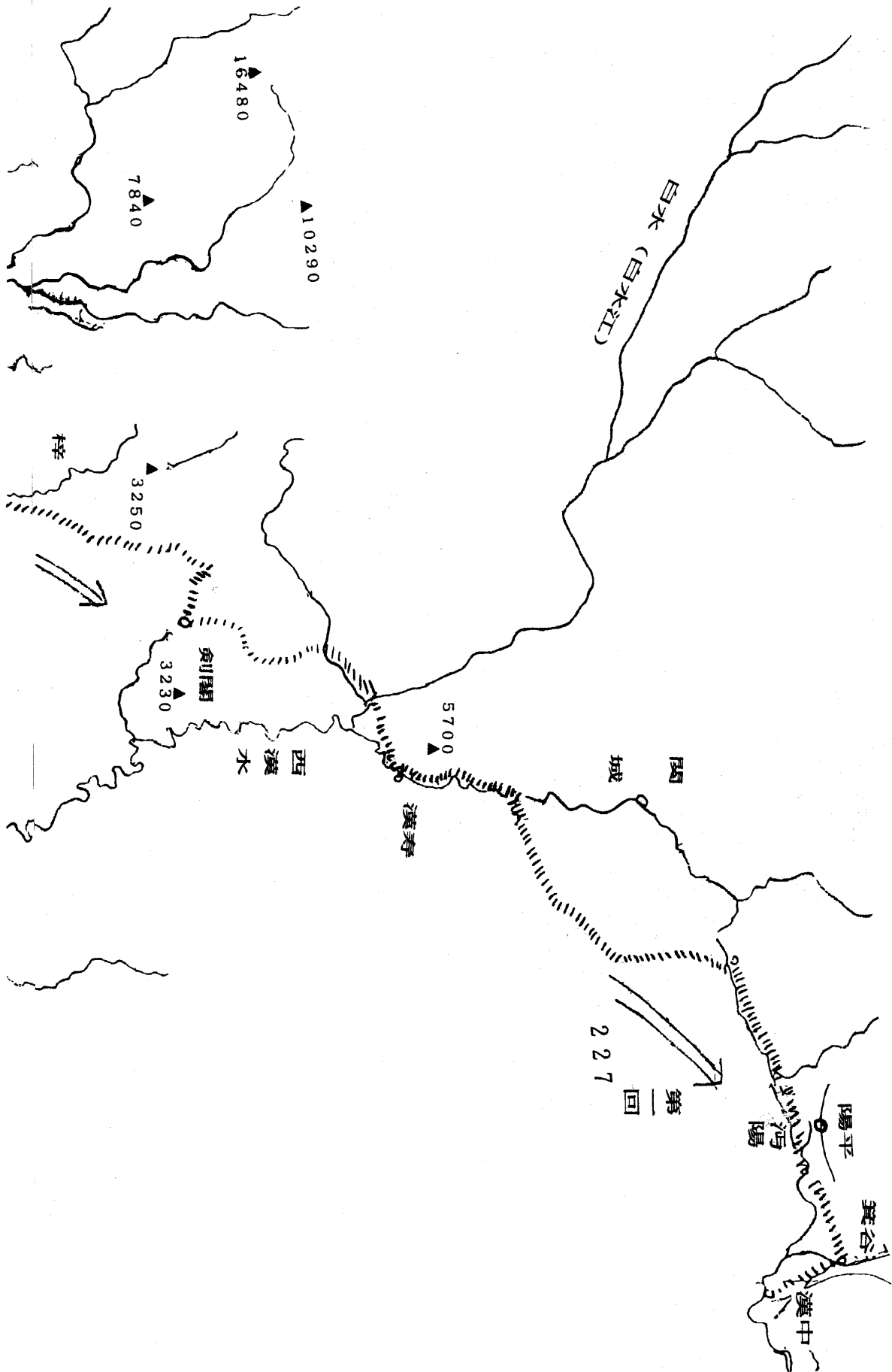
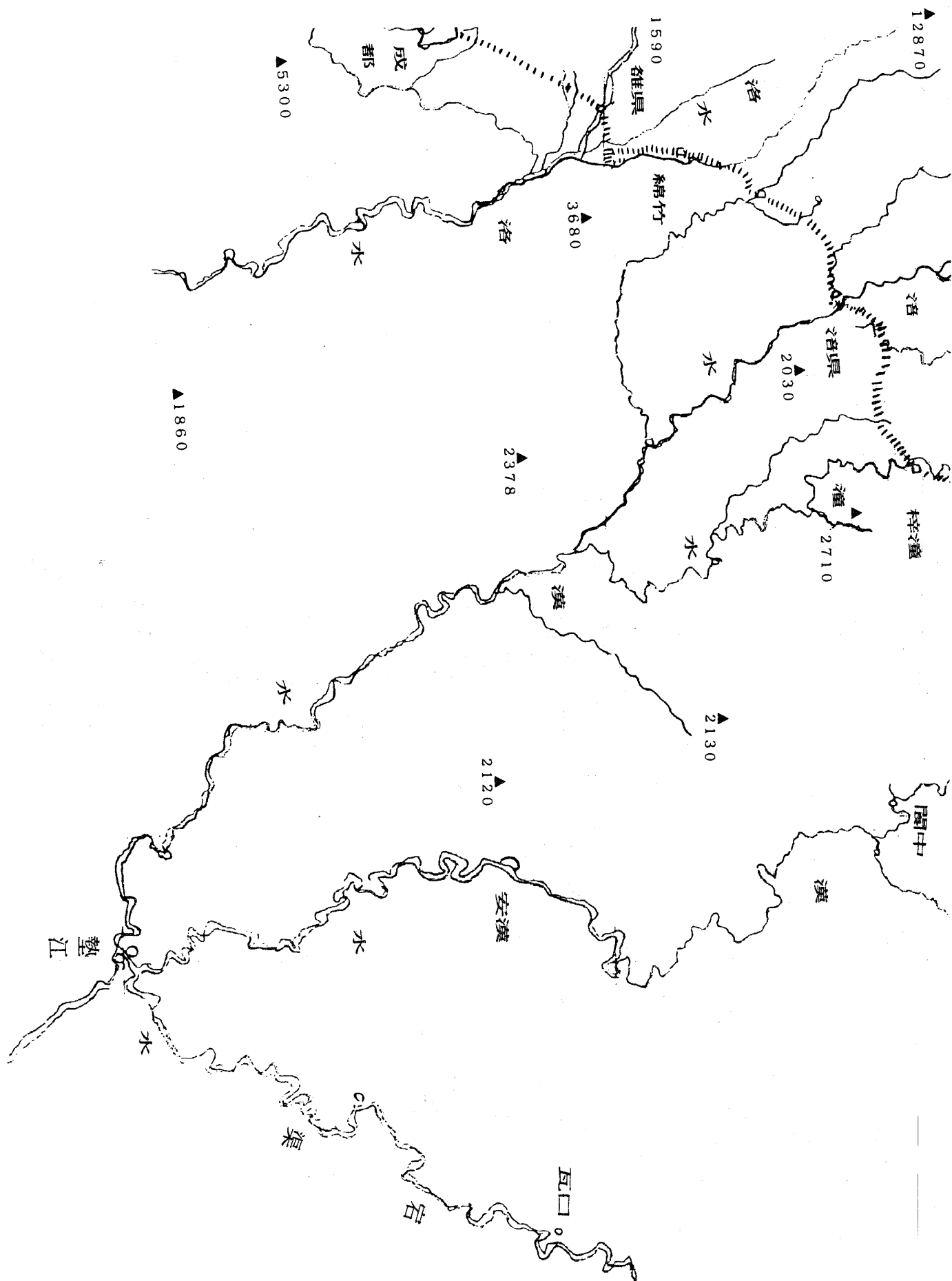


図 2：諸葛亮の第 1 回（建興 5 年、西暦 227 年）経路

////// が経路。1/127 万。数字は海拔（メートル）。（ ）内は現在名。





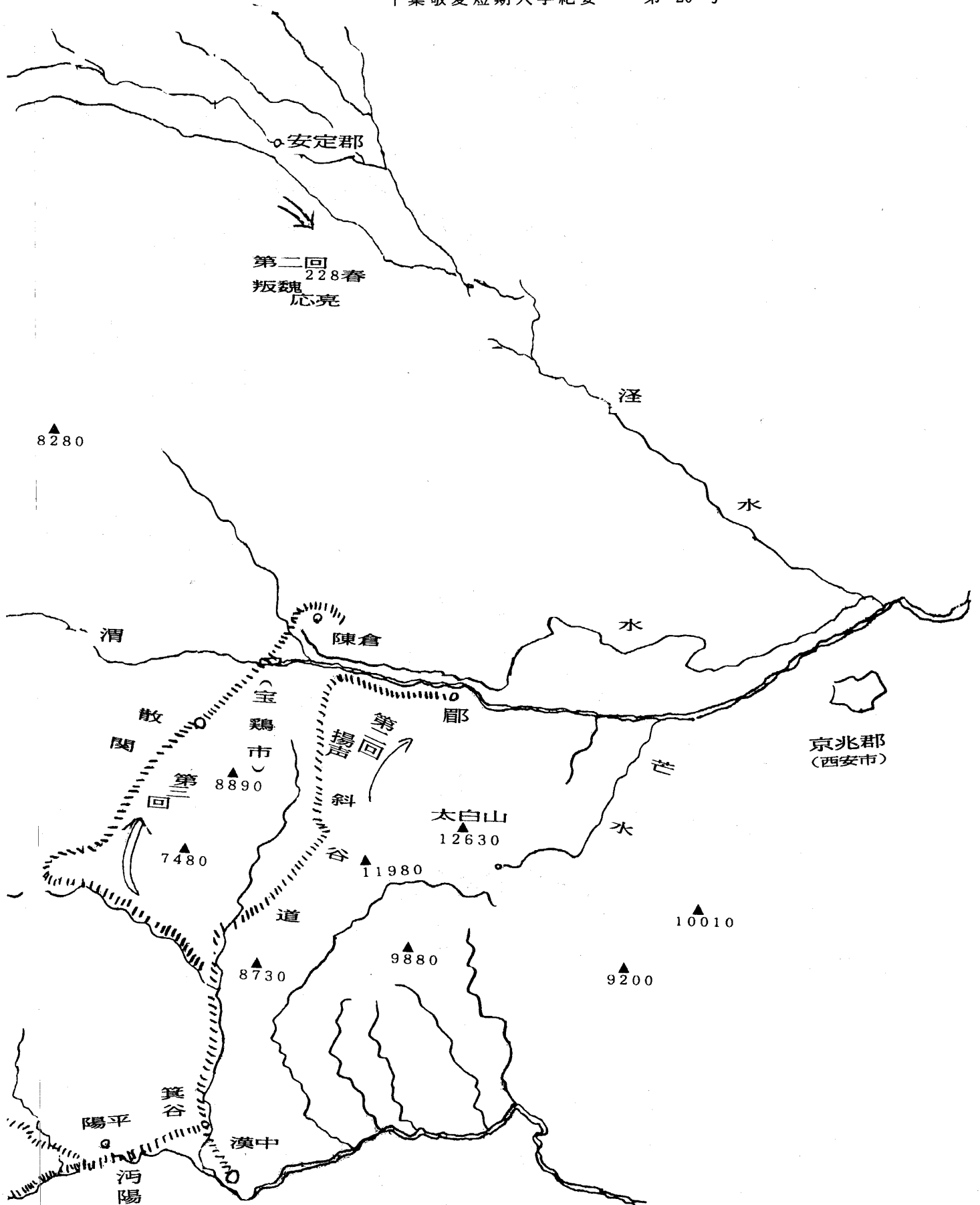


図3：諸葛亮の第2回（建興6年春。228年）・第3回（同年冬）経路

///// が経路。1/140万。数字は海拔（フィート）。（ ）内は現在名。

⑨ 第2回の斜谷道は、揚声：実際に踏破したわけではない。

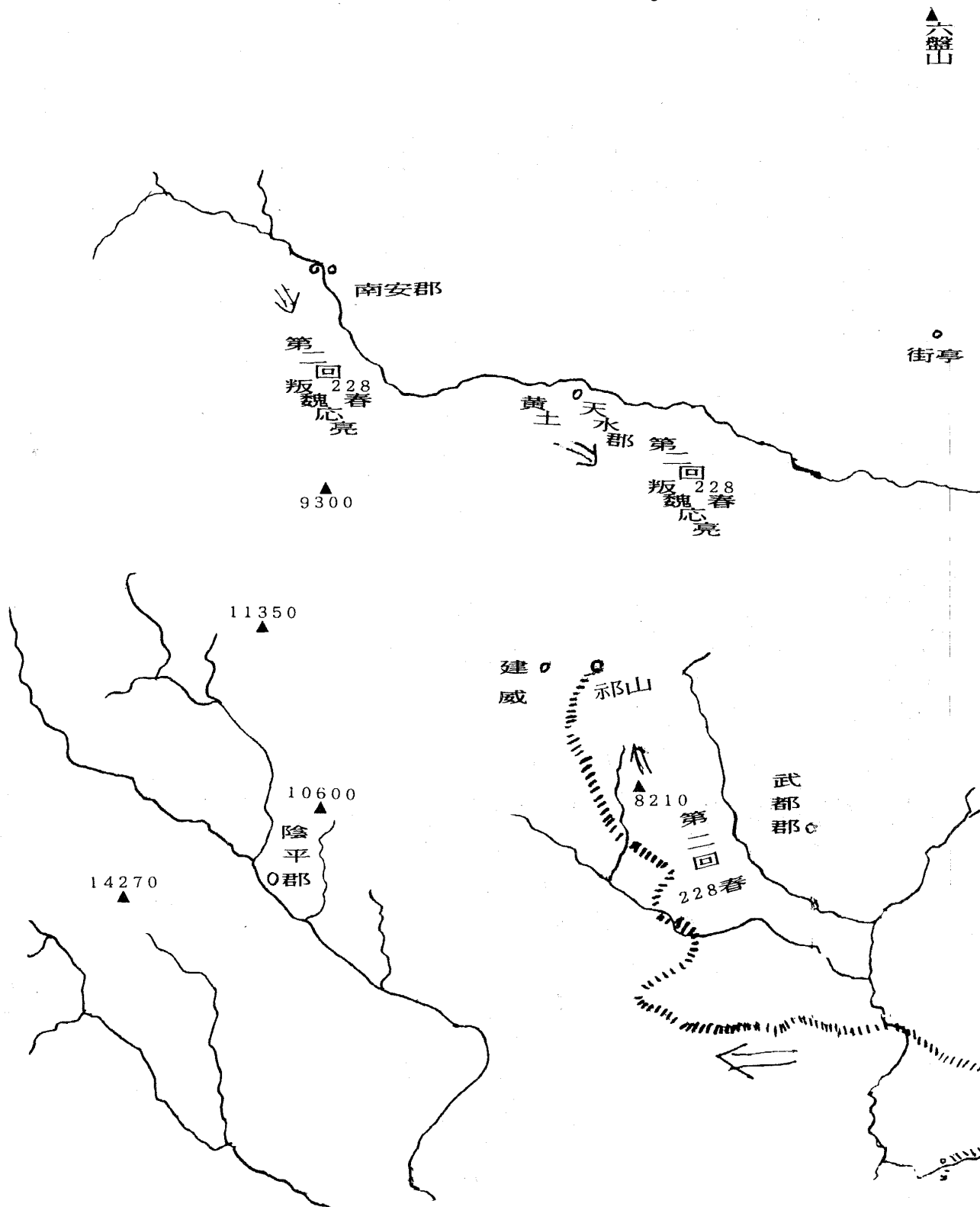


図 4：第 4 回（建興 7 年。229 年）・第 5 回（同 9 年。231 年）・第 6 回（同 12 年。234 年）経路

////// 経路。¹/₁₅₅ 万。

数字は海拔（メートル）。（ ）内は現在名。

××××× 張郃の蜀侵攻経路（子午道）。

